



玉陵石彫獅子（レプリカ）

## 玉陵石獅子レプリカの寄贈を感謝す

館長 外間 正幸

このたび尚裕氏から当館に、玉陵石獅子のレプリカが寄贈されました。

実物はこれまで当館の玄関正面に展示されていましたが、玉陵の修復にともなって元の所に戻されたため、今回の寄贈となりました。尚氏は、博物館が戦後30余年も大切に保管したお礼として、またもうひとつには、このすばらしい石彫獅子を専門家や一般の人々にもじかに見せたいとの御主旨からレプリカの寄贈を決意されました。そのために尚氏はぜひ立派なものをつくるべく、一昨年8月に京都科学標本社に製作を依頼し、それからは当館での型取りや京都での製作にもたびたび立ち会い、とくに仕挙げの際には彩色等が本物にたがわぬようよく見とどけるなどしてきました。そして、昨年12月ようやく完成するにいたりました。このために凡そ300万円の費用がかけられ

ております。

当館ではこの立派なレプリカを尚裕氏の御意志に添うよう、ロビーに展示して、永く大切に保管したいと思います。

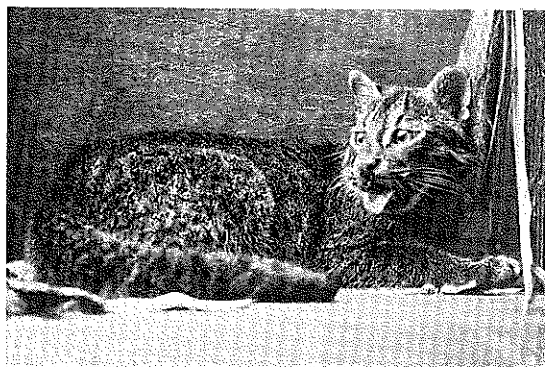
実物の石獅子は、琉球のもっとも栄えた尚真王時代の1501年に尚真王が父尚円のために造営され、それ以来第二尚氏歴代の墓陵となった玉陵の上におかれたものです。柔和な顔つきをした一対の石獅子で、平和の象徴として岩上におかれていたのを今次大戦で落下し、博物館に保管展示されてきました。玉陵とともに国の重要文化財に指定され、沖縄の石造美術品中第一級のものであります。

このような立派な芸術品のレプリカ製作に多額の費用をかけ、尊い御意志で御寄贈下さった尚裕氏の御厚意と当館への御協力に対し、深く感謝し、心から厚く御礼を申し上げる次第であります。

# 特別展「沖縄の天然記念物の動物たち」

写真パネル展大盛況のうちに終る！

—延35,000人が観覧—



イリオモテヤマネコ

日本の南端に位置し、原始林が保存された、わが国唯一の秘境西表島には、<sup>1</sup>生きた化石、イリオモテヤマネコが生息しています。1967年に新種のヤマネコであることがわかり、その後、骨格の研究、飼育観察も行われ、生態については徐々にわかってきております。現在、生息数は40頭以下といわれております。この種は、今から1,000万～500万年前に中国大陸に生存していたメタイルスの化石に酷似することから、琉球列島の成り立ちを考えるうえで非常に貴重な生物である。

前おきが少々長くなりましたが、1971年に捕獲され、琉球大学理工学部生物科の池原貞雄教授のもとで、およそ8年間飼育観察を続けていたイリオモテヤマネコが、近々西表島で半自然状態のもとで観察を続けることになりました。県立博物館では、このヤマネコを西表島へ移す前に是非県民に一般公開してほしい主旨を教授に申し入れましたところ、快諾していただきましたので、県内の天然記念物に指定されている動物についての啓蒙もかねて、この度の特別展を企画した次第です。

会場は、第二展示室を使用し、動物写真パネル37点、解説パネル29点、それに剝製・液浸標本、鳥の巣穴木と比較のために化石標本なども展示しました。

生体標本はイリオモテヤマネコ、ケナガネズミ

それにセマルハコガメを展示し、特に前者2つについては、観客にさらされ、その結果生じるストレスの影響を考慮し10月7㊥～8㊥、14㊥～15㊥はイリオモテヤマネコを、21㊥～22㊥、28㊥～29㊥はケナガネズミを公開日にすることになった。

イリオモテヤマネコの一般公開日には、観客が、早期から博物館の庭に蛇行した列をつくり、さらに館外の歩道にまで長い列をつくるなど大盛況でした。この特別展を観覧したのは、延35,000人で整理のために延58人のアルバイト学生の応援を得た次第です。また、展示期間中には、天然記念物の動物についての問い合わせも多く、新聞紙上では「…県は、天然記念物を理解してもらうため、初めてのキャンペーンをした……。今後もとどくんでほしい…」などの要望がだされるなど、天然記



列をなす参観者

念物について、かなり啓蒙でき、認識していただいたものと館員一同自負している。

なお、特別展最終日には、池原教授による文化講座を行いました。大変好評であった。

最後に、この特別展が大盛況のうちに終わりましたのも池原教授をはじめ、琉大風樹館、県広報課など多くの方々の積極的な支援、協力があったからこそ成功したのである。

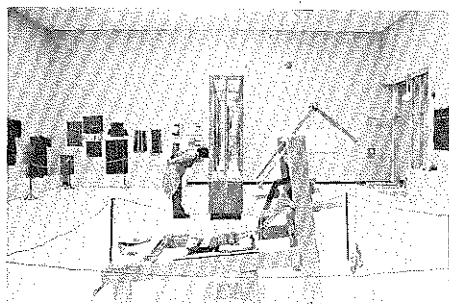
今後ともよろしく御指導を願います。

## 「読谷山花織展」開かれる

当館では1月23日㊦から2月14日㊦の期間、読谷村立歴史民俗資料館、首里琉染の後援を得て、特別展「読谷山花織展」を当館第2室で開催した。この特別展は、いわゆる「読谷山花織」が奄美諸島を含む沖縄の「花織」のなかに占める位置を明らかにし、そうすることで読谷山花織と沖縄の「花織」全体の発展に寄与したいという趣旨で開かれたものである。会期中は読谷山花織の関係者や織物関係者、織物愛好家が訪れ、読谷山花織をはじめとする沖縄各地の花織に見入っていた。

「読谷山花織」とは、字義からいえばかつて読谷村（旧読谷山）で織られ、現在も織り続けられている「花織」のことをいう。「花織」とは浮糸で「花」模様をつくった紋織のことである。

「花織」と呼ばれる織り方、織物は「読谷山花織」を含めて8種類あり、奄美諸島から与那国島まで各地に分布している。そのうち読谷村で織られた花織は5種あり、現在では3種の花織が生産されている。ただ、その5種の花織は織り方自体としては読谷村独自のものではなく各地に分布していたと考えられる。そのデザインや生産量にお



展示風景

いて読谷村がきわだっていたこと、そして現在も生産が盛んであるということ、この2点に読谷山花織の意義があると思われる。

今回は、読谷山花織とともに奄美諸島から与那国島まで各地に分布する花織の資料もあわせて展示し、比較のための資料とした。そのため資料借用は各島・各地域に及んでいる。多くの機関・団体・個人の御協力がなければ不可能な特別展であった。

なお、1月17日㊦には第59回博物館文化講座として、渡名喜明学芸員による展示解説が行なわれた。

## 戦前の壺屋陶器当館に寄贈される

——あるアメリカ人蒐集家より——

去る2月6日、午後3時にアメリカ人蒐集家が所蔵していた1920年～1930年代にかけて壺屋で製作された陶器14点が当館に寄贈された。

当日の贈呈式にはアメリカ側からウルリック・ストラウス在沖米国総領事、ジェームズ・ブラウン嘉手納基地空軍司令官、県教育庁社会教育課長等が出席してストラウス氏より外間館長へ手渡された。

寄贈者名は所有者の要望により公表はさけるが、これらの陶器は終戦直後、台湾で入手してアメリカへ持ち帰ったものといわれている。



贈呈式風景

今回寄贈された陶器14点のなかには小橋川仁王（初代）の作品一点、永昌（二代月仁王）との合作六点、高江洲次郎の作品二点などが含まれている。

これ等の陶器は大正時代から昭和初期にかけて壺屋で盛んに作られていた貼付文、彫絵文などを知る上でまとまった好資料であり、展示にも大いに活用出来る。

このたびのアメリカ人某氏から寄贈された壺屋陶器14点は琉米文化交流の一環として考えた場合意義深いものがある。アメリカ側の寄贈者代表にはアジア太平洋分科委員会委員長レスター・エル・オルフ氏の尽力も大きく、地元沖縄側で仲介役を果たしたストラウス総領事、米国から沖縄まで輸送の労をとってくださったブラウン空軍司令官に心から感謝の意を表し、早速当館では寄贈者とオルフ氏に感謝状を贈呈した。

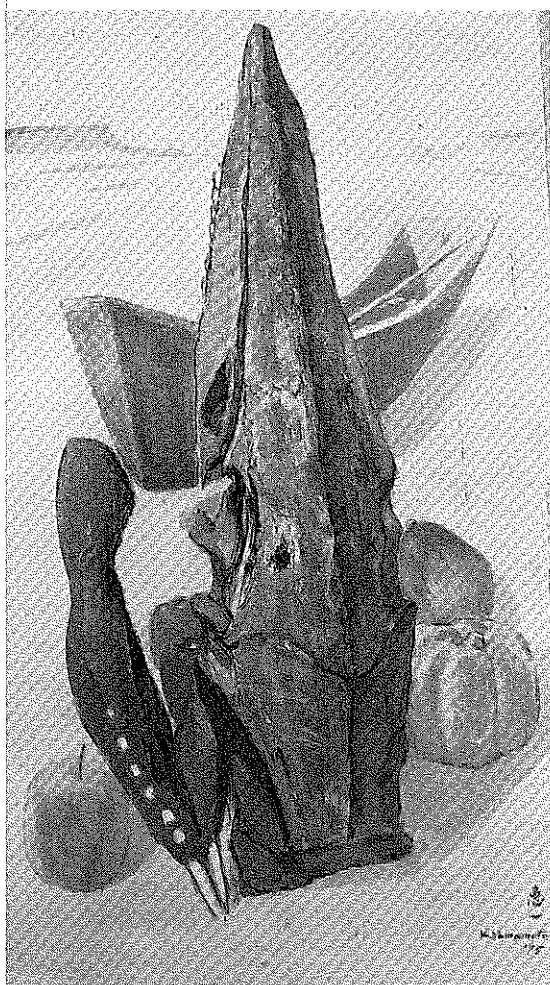
なお、寄贈を受けた陶器14点は去る3月1日より二階陶磁器展示室（第5室）入口ケース内に展示して一般公開を行っている。

## 山元恵一遺作展開催される

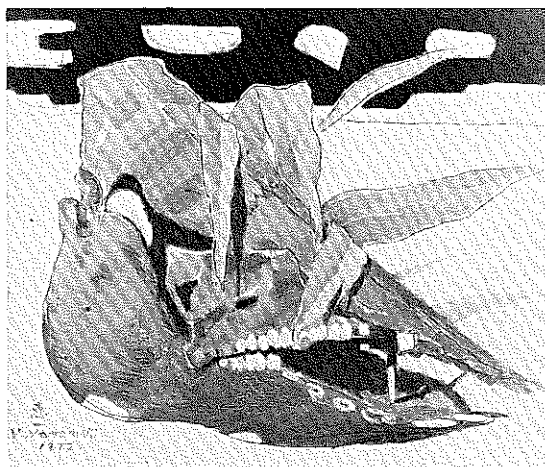
「山元恵一遺作展」（会期、昭和53年12月6日から15日まで）は沖縄画壇で活躍した同画伯の偉業を偲ぶとともに、後進を励ます目的で当館と同展実行委員会の共催により特別展示室において開催された。

戦後の沖縄画壇は廃墟の中から一步一步ねばり強く、地道な活動を続けて今日の隆盛をみるに到っている。山元画伯はそのなかでも数少ないシュールリアリストとして注目され、一作一作に大いに期待が寄せられたが、見事にその期待に答える力作を次々次々と発表した。

彼は東京美術学校油絵科を昭和13年に卒業して、昭和16年県立第二中学校の美術教諭として奉



(写真1)「岬」1975年 100.0×80.3



(写真2)「花粉」1972年 91.0×72.7

職した。

戦後はいちはやく屋部憲氏等と共に沖縄美術家協会設立のために奔走し、また「沖展」創設当時から運営委員として参加して、作品発表はもとより、審査ならびに会運営にあたっても多大な貢献をしてきた。

昭和25年、首里高校教諭を経て、昭和27年琉球大学美術工芸科助教授（のち教授に昇格）となり多くの後進を育てた。

一方、1968年から4年間にわたって当館の運営協議会委員をつとめ、博物館活動に対しても尽力され、より深い理解を示された。

同遺作展会場には生前の山元画伯の人格がそのままにじみ出た作品の数々が展示され、会場を訪ずれた観覧者に強い感動を与えていた。

なお、この遺作展開催を記念して、ご遺族の山元文子氏より「岬」（F40号、油絵）〔写真1〕が当館に寄贈された。

## 新資料紹介

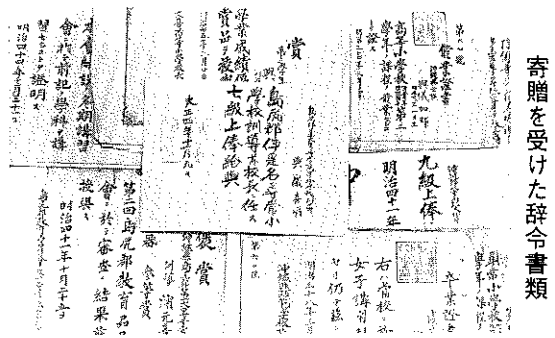
## 〈書跡〉

### 賞状・修了証書・卒業証書・辞令書等

寄贈者大里喜誠氏（ビコー商事社長、沖縄県体育協会会長）の両親の小学校1年修了（明治28年）をはじめとして、賞状・卒業証書・教員の辞令書・講習証明書など合計180枚である。その内訳は、父与儀喜明関係のもの116枚、母浜元マゼニ（のち与儀喜久子）関係のもの64通である。ともに首里出身であるが、父喜明氏は、島尻郡に育ち、教員生活も主にそこで送っている。

これらの辞令書類からは、当時の教育制度や社会背景をうかがい知ることができる。たとえば、文喜高等小学校というのがある。これは当時の摩文仁間切と喜屋武間切に一枚の高等科なので、一丁ずつ取ってつけた校名である。当時は高等科へ通う者も少なく、2・3間切に一枚となったようだが、大正期に入ると分離し、増設していったようである。

喜明氏は、大正4年に伊是名尋常小学校の「訓導兼校長」になっている。「訓導兼校長」というのも珍しいが、満27歳で校長になったのは、当時としても異例の昇進であったにちがいない。その後県視学をつとめたのち、「那覇尋常高等小学校訓導兼校長兼、那覇市立商業公民学校教諭兼校



寄贈を受けた辞令書類

長」に任ぜられている。

その任命権者も、教員免許状は「県知事」であり、教員の辞令は「沖縄県」である。叙勲関係で「内閣」があり、「文部省」があり、八重山へ最初赴任した母喜久子氏には、「八重山島庁」の辞令書もある。

明治31年、33年の賞状に、伯爵勝安芳、子爵榎本武揚の名が見える。県内では、奈良原繁知事、日比重明知事、沖縄教育会長岸本賀昌、島尻郡教育部長齊藤用之助らの名も見える。

二人の単なる辞令書類という範囲をこえて、貴重な歴史資料といえよう。

## 新資料紹介

## 〈自然〉 カブトガニ

雌雄つがいで、大きさは雌57cm、雄42cm、学名をタキプリウス・ツリデンタータスといい、世界で3属5種しかいない。

標本は、九州大学農学部附属須崎水族館で飼育されていたものを、昭和53年12月9日同大学理学部地質学教室の石橋毅博士を通じて寄贈していただいたものです。現在、大きさ1.5×0.5×0.5mの水槽を設置し、一階ロビー中央で展示しています。カブトガニは、古生代に栄えた三葉虫から進化したと考えられていることから、比較のために三葉虫化石も並べて展示してある。

硬いかぶとをかぶっていることからカブトガニと呼ばれ、アメリカでは馬ていガニ、イギリスでは王様ガニと呼んでいます。しかし、カニの仲間ではなく、むしろクモに近く、分類上は節足動物の剣尾類に属している。

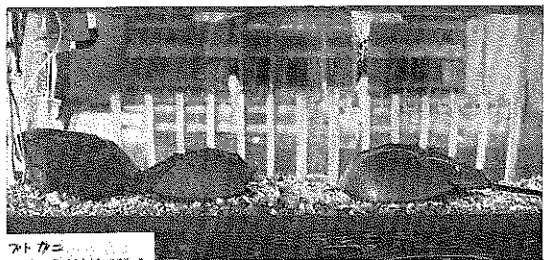
成体は、大きいもので約60cmあり、体は、頭胸部、腹部、尾剣部に分かれ、1対づつの単眼と複眼をもち、腹面には7対の付属肢があり、尾は剣状に尖っている。

現在、瀬戸内海と北九州の一部の海岸に生息しており、特に岡山県笠岡市では、カブトガニ繁

殖地、として、カブトガニを天然記念物に指定し、保護しています。また、外国では、台湾・中国南部・ボルネオ・セレベス・マレー近海、それに北米東岸一帯に分布している。

なお、このカブトガニは、形がグロテスクで怪物を思わせ、さらに始終雌雄がくっつきあい、時にはひっくり返ったりするなど、ひょうきんな仕草に多くの観客が足を止め、じっくりと観察している。

また、この標本は、当館の永い歴史を破って、生き物を展示したことに「まさに画期的なこと」という評をうけたユニークな展示物である。



展示中のカブトガニ

## 文化講座案内

### 博物館特別文化講座

- 4月14日㊥ 1.ソ連モンゴル共同発掘調査について  
N・Nクラマレンコ氏  
2.白亜紀の生物界について  
A・G・ポノマレンコ氏

### 昭和54年度博物館文化講座

- 第62回 4月28日㊥ 沖縄の民話  
遠藤庄司氏  
(沖縄国際大学教授)
- 第63回 5月26日㊥ ケラマジカと保護のはなし  
池原貞雄氏 (琉球大学教授)  
新納義馬氏 (琉球大学教授)
- 第64回 6月16日㊥ 沖縄の漁業  
上田不二夫氏  
(沖縄水産高校教諭)
- 第65回 7月28日㊥ 博物館で描こう  
与儀達治氏 (興南高校教諭)
- 第66回 8月25日㊥ 伊江島の先史時代  
安里嗣淳氏 (文化課専門員)
- 第67回 10月6日㊥ 沖縄の古窯を語る  
大城精徳氏 (陶磁器研究家)  
曾根信一氏 ( )  
善天間敏氏 (糸満高校教諭)
- 第68回 11月3日㊥ 映写会 賀教
- 第69回 11月25日㊥ 史跡めぐり  
知念勇学芸員
- 第70回 12月15日㊥ グシクのはなし  
嵩元政秀氏 (興南高校教諭)
- 第71回 1月27日㊥ 沖縄中部の地質めぐり  
大城逸朗学芸員
- 第72回 2月23日㊥ 沖縄の自然環境と天然記念物  
新納義馬氏 (琉球大学教授)
- 第73回 3月22日㊥ 熱帯から亜熱帯の白アリの生活  
安部啄哉氏 (琉球大学助教授)

### 第1回移動博物館文化講座

- 12月8日㊥ 1.久米島のおいたち  
大城逸朗学芸員  
2.沖縄の城 (グシク)  
名嘉正八郎副館長  
3.映写会  
沖縄の民芸 (昭和15年製作) 他2本

## 昭和54年度特別展案内

### 会場・当館第2室

会 期	展 示 会	主 催
4. 10~ 4. 15	琉球大学美術工芸 科卒業制作展	同 科
4. 19~ 4. 22	島ひろ子タピスト リー展	島ひろ子
5. 11~ 5. 31	新収蔵品展	当 館
6. 12~ 7. 1	沖縄の洞穴と洞穴 生物展	当 館
7. 5~ 7. 15	新匠工芸展	新匠工芸会
7. 19~ 7. 29	安谷屋正義回顧展	同展実行委 員会
8. 1~ 8. 5	山城耕雲遺作展	耕雲書道愛 好会
8. 10~ 8. 30	伊江島の先史時代 展 (共 催)	伊江村教育 委員会 当 館
10. 2~10. 14	やちむん会10周年 記念展 (共催)	やちむん会 当 館
10. 17~10. 21	沖縄県芸術祭写真 展	沖縄県教育 委員会
10. 24~11. 4	国・県指定美術工 芸展	沖縄県教育 委員会
11. 7~11. 11	沖縄県芸術祭工芸 展	沖縄県教育 委員会
11. 14~11. 18	沖縄県芸術祭美術 展	沖縄県教育 委員会
11. 20~12. 2	南風原朝光・名渡 山愛順遺作2人展	当 館
12. 6~12. 9	第1回沖縄県立博 物館移動展 (久米島)	当 館

### 沖縄県立博物館だより No.6

発行年月日 昭和53年3月30日

編集・発行 沖縄県立博物館

所在地 沖縄県那覇市首里大中町1の1

〒903 TEL. 0988-32-2243

54-4353